

2025年度 ロードマップ (プラットフォーム業務・データ相互運用性業務)

2025-03-26



FY24狙いと成果

読本シリーズ※¹やガイドブックを発行し、経営者やCDO（Chief Data Officer）がデータスペースを含むデータ利活用の基本的な流れを理解できるようになった。

当初主対象

データスペースに関わる幅広い
ステークホルダー



課題：そもそもデータ利活用の基礎が普及していない
→ 対応：企業のデータマチュリティ※²等基礎力向上が必要

注力した
対象

経営者/CDO

政府相互運用性フレームワーク(GIF: Government Interoperability Framework)のデータモデルを整備し公開したことで、相互運用性を確保しやすくなった。

主対象

データ設計やデータ活用に携わる
実務者



FY25狙いと目標

データスペース、データガバナンスを中心として国内外のコンポーネントを整備・体系化し、事業/IT部門長が実践できるようにする。

主対象

経営者/CDO、事業/IT部門長

実務に近いGIFデータモデルやコアデータパーツ※³を提供し、より利用しやすくする。

主対象

データ設計やデータ活用に携わる
実務者

補足) FY24 主要実績



取組項目	アウトカム	アウトプット	FY24取組の結果、分かった課題
参照アーキテクチャ整備	欧州行政機関向けのフレームワークEIRA※1の利点を理解できるようになった。	相互運用性向上のための参照モデル活用ガイドを公開。	EIRAは欧州かつ行政機関向けのため、国内産業界向けのフレームワークが必要。
データスペースガイド	データスペース活用の基礎的かつ具体的な手順を理解できるようになった。	データ利活用・データスペースガイドブック2.0版を公開。	工程をより詳細化したり、AI活用等、より実践的な手順をカバーする必要がある。
推進（コンテンツ公開、イベント開催）、事例集	国内におけるデータスペースの具体的な使われ方を俯瞰できるようになった。	国内を含むデータスペース事例をまとめて公開。	国内事例は少ないため、具体的な活用方法(想定ケース、ユースケース)の充実も必要。
人材育成・教育コンテンツ	経営者向けの読本の要点を簡単に理解できるようになった（一部のみ対応済）。	経営者向けの読本群を公開し、それらを解説する学習資料も公開した。	潜在的利用者が活用できる実践的なコンテンツ、公共財が不足している。昨今の読本やガイドを含む知識体系を整理して公開する必要がある。
GIFデータモデル改訂	GIFをより利用しやすくなり、システム設計・運用コストの削減やシステム間のデータの相互運用性拡大を期待できるようになった。	コアデータモデル※2を中心に必須項目や項目名の構造等の整備を実施し、デジタル庁から公開した。	コアデータモデルを利用したデータ定義があまり浸透していない。より業務に密接した実装データモデルの充実も必要。
GIFツールの提供	GIFツールの利用を、システム調達時の仕様に組み込むことで、データ品質の向上やデータの相互運用性を確保した調達が可能となった。	既存のデータをGIFデータモデルに変換することに加え、データの内容の整合性を確認するツールやGIFに準拠したデータ設計や実装が行われていることを確認するツールを公開した。	コアデータモデル改訂に対応したツールのバージョンアップ対応の検討が必要。
データ辞書の整備	IMI (Infrastructure for Multilayer Interoperability:情報共有基盤)のコア語彙に関して日本が国際的に主導可能な状態になった。また、AI等への知識基盤として活用可能となった。	IMIコア語彙(法人)に関して、NIEM・SEMICとマッピングし、国際データマッピングを行うためのツールとガイドを整備して提供した。IMIコア語彙を中心とし、国際語彙との関係性をデータ辞書として整備した。	国際マッピングのアジア展開やデータ辞書をオントロジーとして整備するための検討が必要。
コード一覧の整備	組織間データ連携の際のコード不一致等のエラーを削減できるようになった。	行政が使用しているコード・コードリストを収集し、一覧として提示した。	陳腐化しないようコード一覧の定期的なメンテナンスが必要だが、コードの最新情報を収集する仕組みがなく、手間がかかる。

※1 European Interoperability Reference Architectureの略で、欧州のデジタル戦略に基づいて構築された公共部門向けの相互運用性を実現させるリファレンスアーキテクチャモデル

※2 人、施設等、社会で汎用的に使えるデータモデルを、コア語彙、コアデータパーツ等を組み合わせて定義

FY25主要ロードマップ



FY25 1Q

FY25 2Q

FY25 3Q

FY25 4Q

マイルストーン・イベント

※イベント詳細・時期 未定

自民党「デジタル・ニッポン2025」★ ★デジタル庁「重点計画」
★経団連提言（3月末）

★Data Spaces Week※¹
（主催：DSA、東京大学等）

欧州国際会議※²（主催：DSSC※³等）★

データ未来会議相当（主催：IPA）★
データ環境推進委員会（主催：IPA）★

ビルディングブロック（BB）※⁴・モデル・ユースケース整理

①

BB要件整理、BB一覧化、
参照モデル調査

▲BB報告v1.0

BBモデル化、ユースケースモデル調査・整理

▲BB報告v1.1

ユースケースモデル集v1.0公開▲

②

データスペースガイドブック（AI活用版）

成果公開▲

データスペースガイドブック(行程詳細化※⁵)

成果公開▲

③

データ利活用のためのガイドブック、ツール
要件整理

成果公開▲

データ利活用のためのガイドブック、ツール
（データマチュリティツール基礎編等）

データ利活用のためのガイドブック、ツール
（データマチュリティガイドブック等）

中間成果公開▲

成果公開▲

④

GIF（教育）

納品（デジタル庁から公開）▲

GIF（防災）

納品（デジタル庁から公開）▲

⑤

データ辞書計画

データ辞書整備（ipadic※⁶）

中間成果公開▲

成果公開▲

⑥

体系整備、年間計画

読本・ガイド解説動画の拡充（随時公開）、ハンズオン随時実施

教育資材2部分公開▲

教育資材2部分公開▲

ガイドブック・ツール拡充

スキル向上・人材、組織育成

※¹ データ活用・連携に関する日本民間団体主導の国際シンポジウム ※² 欧州中心の国際シンポジウム ※³ Data Spaces Support Center
※⁴ アーキテクチャモデルの構成要素・部品・ドキュメント・法規則等 ※⁵ 事業/IT部門長向けにタスク内容を詳細化 ※⁶ 日本語の形態素解析に用いられる辞書

FY25の主な取組項目 概要



#	項目	アウトカム	取組内容	アウトプット
①	データスペースのためのビルディングブロック（BB）・モデル・ユースケース整理	データスペース/データ連携エコシステムやコミュニティを構築する企業・団体がその 要件を明確にし、的確に方針設計できるようにする。	国内外の多様なコンポーネント、サービス、ドキュメントの整理・体系化が進んでいることから、調査した上でまとめて公開する。データ利活用及びデータスペースを活用した事例・ユースケース等をまとめる。本件は、関係機関と連携する。	参照モデル、ユースケース集等
②	データスペースガイドブック（AI活用版、行程詳細化版）	事業/IT部門長がより 実践的なデータスペース・データ利活用の流れを理解できるようにする。	2024年度の成果であるデータスペースガイドブックに対し、AIを活用する際に考慮すべき点を加えたり、行程の説明を詳細化した拡充版を公開する。本件は、関係機関と連携する。	データ利活用・データスペースガイドブックの次版
③	データ利活用のためのガイドブック・ツール整備 （データマチュリティ・アセスメント等）	企業等が 組織的データ活用能力を自己評価し改善できるようにする。	ガイドブックやデータ利活用を始めるためのツールを整備し、公開する。本件は、関係機関と連携する。	文書形式のデータマチュリティ評価ツール、ユースケース適用結果報告書等
④	GIF拡充（教育・防災）	行政分野のデータ相互運用性の確保ができるようにする。	教育・防災に関するデータモデルをGIF実装データモデルとして整備。また、データの記述形式や参照するコードリスト等のGIFコアデータパーツの拡充を行う。本件は、デジタル庁と連携する。	コアデータモデル/コアデータパーツの改善・追加、教育・防災等の実装データモデル
⑤	データ辞書整備	自然言語処理、生成AIを 日本語で効果的に活用できるようにする。	用語の意味を定義するIMIのコア語彙を更新し、関連語(同義・同意・類似語)の辞書としてipadicを拡充する。本件は、関係機関と連携する。	コアデータモデル語彙の改善・追加、ipadicの同義語、同意語、類似語版
⑥	スキル向上・人材、組織育成	企業等が データ利活用やデータ連携のナレッジの存在を知り、容易に理解し、実用できるようにする。	IPAが公開している資材の活用方法や内容を解説する動画等を拡充し、イベント・セミナーを実施する。本件は、東京大学と連携する。	解説動画等の教育資材、オンラインセミナー・講演会・セミナー

取組項目詳細

ビルディングブロック（BB）・参照モデル整備及び ユースケースモデル拡充

概要	背景	データスペース開発・活用の際、我が国で利用可能なビルディングブロックやその役割・スコープが複数存在し、明確でない。また、データスペース活用事例がまだ少なく、データスペースの活用方法に関するイメージや始め方が浸透しているとはいえない。
	内容	国内のデータ関連の取組やその成果物情報等をまとめ、国内版の参照モデルとして整備する。また、データ利活用やデータスペースを活用したユースケースモデルをまとめる。
目標		データスペース/データ連携エコシステムを構築する企業・団体がその要件を明確にし、的確に方針設計できるようにする一環として、コンポーネント等を整理し体系化したモデルを実現。
成果物		参照モデル、ユースケースモデル集
スケジュール		2025年6月末：参照モデル：1.0版公開。ユースケースモデル集：とりまとめ・骨子作成 2025年9月末：参照モデル：情報追加1.1版公開(Data Spaces Week)。 ユースケースモデル集：α版公開 2026年3月末：ユースケースモデル集：1.0版公開
備考		

データ利活用・データスペースガイドブック

概要	背景	データの活用先としてAIは筆頭の一つ（国連のグローバル・デジタル・コンパクトでの注目や、データマネジメントの観点等）。AI活用まで視野に入れたデータスペースガイドが必要。また、タスクの全体的な流れは示すことができたが、読者がすぐにタスクを開始できない可能性もある。
	内容	現状のデータ利活用・データスペースガイドブックのタスク等の要所において、AI活用の際の考慮点や変更点を明確にする。（例：AIで用いるデータ特性に応じた対応、AIモデルへのデータの渡し方等）また、事業部門でのタスクで深掘りして詳細化した内容を追記する。
目標		想定読者がデータのAI活用をする場合の特有の考慮点や変更点が理解できる状態にする。実際のAI活用事業を基に、現状の業務現場をより効率的に運用できるドキュメントを提供する。また、事業部門がタスクをすぐに開始できるよう、記載の詳細化を行う。
成果物		データ利活用・データスペースガイドブックの次版として公開
スケジュール		FY25 1～2Q：AI活用版作成、公開。FY25 3～4Q：事業部門詳細化版を作成、公開。
備考		データ利活用・データスペースガイドブックの新規資料として公開するか、既存資料に追加するかは要検討。

データ利活用のためのガイドブック・ツール整備

概要	背景	経営にとって重要なデータの価値を評価する仕組み（データマチュリティ）が各国政府により強力に推進されている。日本ではデータのマチュリティを評価する仕組みは未整備である。
	内容	各国政府が構築したデータの価値を評価する仕組み、ガイド、評価ツールを収集する。データ利活用に関するユースケースを作成し、テストベッド環境等で実践し、知見を収集し公開する。
目標		企業等が組織的データ活用能力を自己評価し改善できるようにするため、日本の官民の組織に適したデータマチュリティ評価ツールを構築する。官民の利用者からのフィードバックを10件程度受け取り、ガイド、ツールに反映する。
成果物		・データの価値を評価する仕組み、ガイド、評価ツール ・ユースケースの実践結果（レポート、プロトタイプ、サンプル、テンプレート、フィードバック） ・課題に対する対策・提案等の公開
スケジュール		1Q : 各国の取り組み状況、評価ツールの作成状況の調査、レポートの公表 テストベッドサービス提供者の選定、ユースケース・シナリオ作成 2Q、3Q : データマチュリティ評価ツールの構築、公開、ユースケース・シナリオ実施、検証、フィードバック収集 4Q : 利用者からのフィードバックをガイド、ツールに反映させる、評価レポートの作成、公開
備考		日立(2024年連邦データマチュリティレポート)、Googleデータマチュリティベンチマーク、協力デロイトで調査の実績があるので、情報収集から始める。

概要	背景	GIFコアデータモデルは見直しを図り、より実践的なデータモデル作成を可能とする形で公開済みだが、データの記述形式や参照するコードリスト等のコアデータパーツの拡充が求められる。GIFコアデータモデルを利用した、実装データモデル(行政・地域サービス・金融)があるが、種類がまだ少ない。
	内容	GIFコアデータモデル・コアデータパーツの拡充 GIF実装データモデルの拡充
目標		GIFデータモデルの理解・適用を容易にし、行政システムの調達仕様書等へ組み込むことで、共通的なデータモデルを利用することによる設計費用の抑制やデータ品質の向上を実現し、今後のデータ流通における相互運用性を向上させる。
成果物		コアデータモデル/コアデータパーツの改善・追加 教育・防災等の実装データモデル
スケジュール		1Qにターゲットの選定。2Q、4Qに順次公開
備考		

データ辞書整備

概要	背景	AIの利活用を日本語で行うために、現代に必要となる辞書の整備が遅れている。RAG（Retrieval-Augmented Generation：検索拡張生成）等のベクトル、ナレッジグラフ、オントロジーなど、AIの知識基盤にあたる阻害要因の改善がされていない。このため、データ品質の向上、AI利活用、国内外の相互運用性に関する知識基盤整備としてデータ辞書に関する整備が必要となる。
	内容	IMIコア語彙を更新し、データの品質および相互運用性を向上させるための辞書をIMI 3として整備。関連語(同義語、同意語、類似語)の辞書としてipadicを拡充する。
目標		IMI3の整備により、データの標準化や国際連携を容易にし、民間企業のデータ及びAI利活用におけるデータ品質の課題を解決する。 GIFとの連携を進めることで、行政システムの調達仕様書等へGIFが組み込まれ、共通的なデータモデルを利用することによる設計費用の抑制及び今後のデータ流通における相互運用性を向上を実現する。
成果物		コアデータモデル語彙（改善・追加） ipadicの同義語、同意語、類似語版
スケジュール		1Qにターゲットの選定。2Q,4Qに順次公開
備考		

スキル向上・人材・組織育成

概要	背景	IPAでナレッジをドキュメント化し公開しているが、ナレッジ利用者のすそ野を広げ、企業が理解し実践しやすくする必要がある。
	内容	IPAのドキュメント類の中から、優先度の高い経営者向けのものを中心に教育資材として整備することで、より多くの人々が効率的にポイントを理解できるようにする。教育資材をマナビDXやYouTube等に公開し、講演会やセミナーで活用する。
目標		教育資材提供数：4部、オンラインセミナー・講演会・セミナー開催数：3回
成果物		教育資材(データマチュリティ関連、データスペースガイド関連、GIF関連、データ辞書関連)
スケジュール		1 Q末　：体系整備、年間計画、骨子作成 3 Q月末：教育資材2部公開 4 Q末　：教育資材2部公開 2025年度下期：講演会・セミナー実施
備考		

IPA

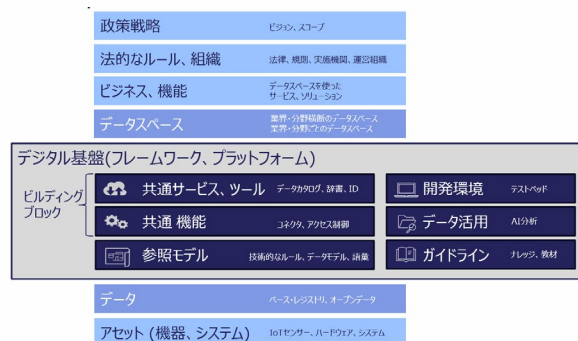
參考資料

(参考)ビルディングブロック(BB)とは

- ◆ BBとは機能やサービス等を体系化してブロック（構成要素）化し、組み合わせてサービスに利用できるようにしたもの
- ◆ データスペースに関連する共通サービス・機能、ツールを示すBBの例

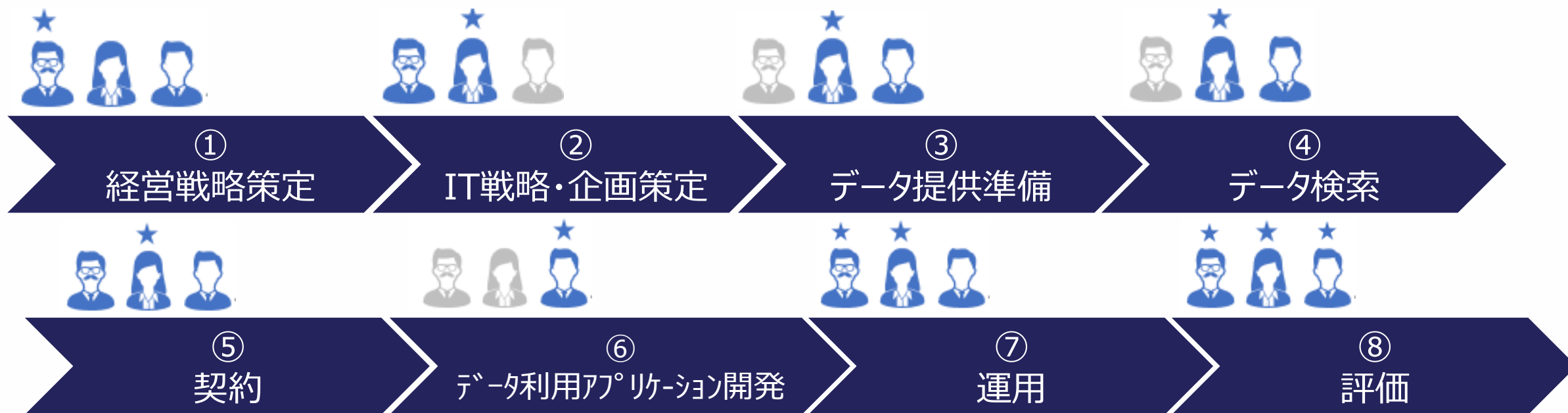
①データ検索	②認証・認可	③データ連携	④データ活用	⑤開発環境	⑥ガイドライン
データカタログ	IDサービス	コネクタ	AI/分析	OSSカタログ	ナレッジ
データ辞書	アクセス制御	ブローカ	可視化	テストベッド	教材
ベース・レジストリ	ログ管理	デリバリー	ナレッジベース	テストデータ	
マーケットプレイス	課金管理	データ管理			

- ◆ 参考) IPA「データスペース入門」のアーキテクチャ全体像



(参考)データ利活用・スペースガイドブックについて

- ◆ データ利用者、提供者向けに組織におけるデータ利活用の具体的な手順を解説



【凡例】



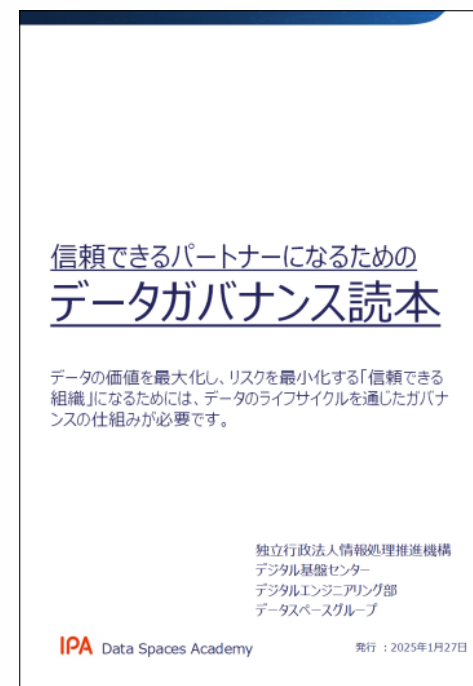
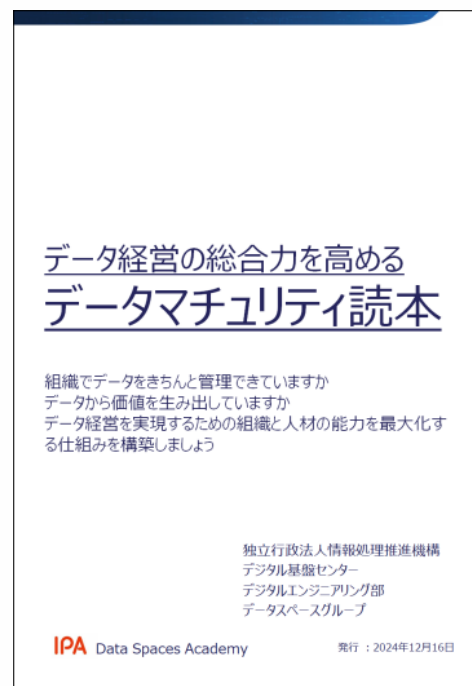
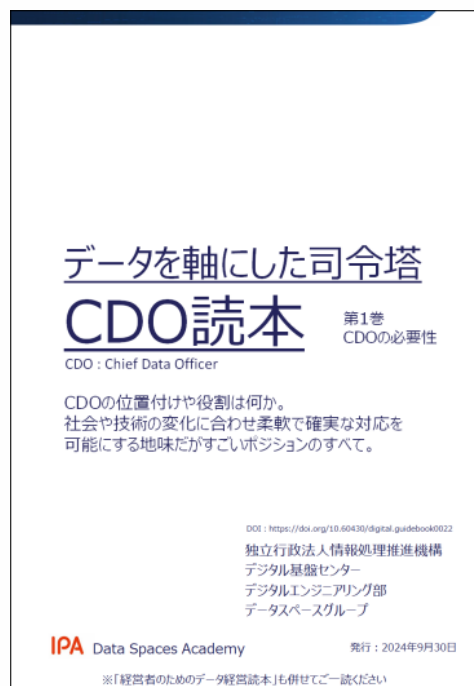
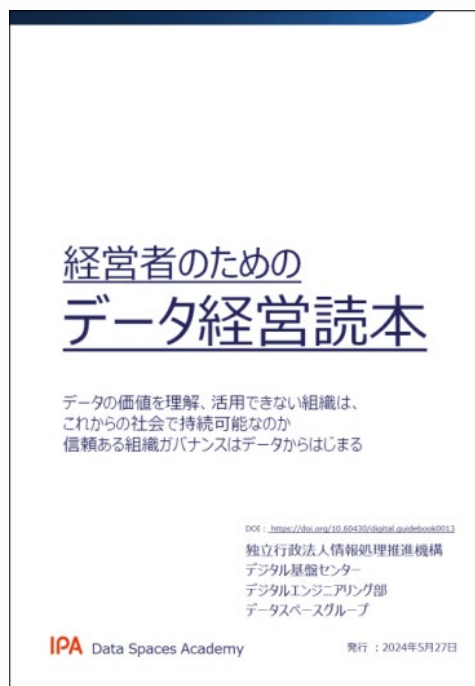
- ・主担当の部門：頭に★マークがついており、かつ青色で表記
- ・主担当ではないが、関係がある部門：青色で表記
- ・関係が少ない部門：グレーアウトで表記



「データ利活用・データスペースガイドブック」URL

(参考) 経営層の啓発のためのData Spaces Academy

- ◆ 経営者向けにデータ経営の要点をまとめた小冊子をシリーズ化
- ◆ データ関連の人材を理解し、データ関連の取組や考え方を学ぶことができる



※今後もデータマネジメント読本、インタオペラビリティ読本などを公開予定

(参考)組織のデータマチュリティ(成熟度)向上について

- ◆ データマチュリティ向上とは？ : データを使いこなし、データの価値を最大化すること
→意思決定が早くなるなど、様々なメリットがある

【データを使いこなす能力が高い】

高度なデータの利用が進んでいる

質の良い多様なデータが使える

信頼でき、使いやすい基盤がある

リーダーがビジョンを持って進めている

組織全体にデータを重視する文化がある

社員が十分なスキルを身に付けられる環境がある



データ
マチュリティ
が高い

【メリット】

意思決定が速くなる

エビデンスベースで合理的に検討ができる

新規ビジネス創出や既存ビジネスの改善がしやすい

迅速なレスポンスで社外からの信用が高まる

社員のモチベーションが上がりやすい

事故のリスクが減る

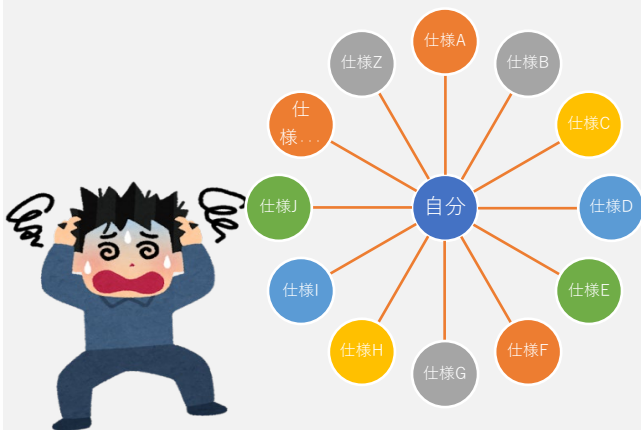
データの価値を最大限引き出せる組織は、人や組織の力を最大限引き出すことができる

(参考)GIFについて

- GIFは政府相互運用性フレームワークの略称。政府情報システムが保有するデータの相互運用性を確保し、効率的な情報共有と情報連携を実現するためのデータモデルやルールをひな形としてまとめたもの。
- GIFは基礎をしっかりと作った上にサービスを構築し、持続・展開させることを目指している。
- GIFを適用することでデータ設計やサービス設計がしやすくなり、利用者に高度なサービスを提供しやすくなります。

現状では

設計のよりどころになるルールやデータのひな形がなく、設計にコストがかかる上、連携先の数だけ調整が発生



GIFでは

ルールやデータのひな型
(参照モデル)



部分利用
拡張

自分の
データモデル

自分の
データモデル

自分の
データモデル

- ひな型を使って簡単に設計できる
- 目的に合わせて柔軟に設計できる

データ保有者、サービス提供者

GIF準拠のデータを活用したサービス

・サービス連携しやすい

GIF準拠のデータを活用したサービス

・サービス間の乗換がしやすい

GIF準拠のデータを活用したサービス

- 新しいサービスが参入しやすい
- 様々なサービスと連携しやすい

(参考)データ辞書について

- ◆ **不整合の起きない**情報を利用するために必要な仕組み
 - データを経営資源として後から利用するためには、もともとのデータがもっている**データの意味を判別するための仕組み**が必要。この仕組みがあれば、データを利用した価値創造が非常に容易になると考えられる。
 - この仕組みの一つが**データ辞書***。企業や団体は、今後このデータ辞書を整備することで、経営環境の**変化に追随**し、さらなる**事業拡大**を目指すことが必要になってきている。

※データ辞書は一般的に以下のようなデータに関する情報を管理する。
データの意味、他のデータとの関係、フォーマット、履歴や起源などのメタ情報など

